

つまり従来の方法では、「止観を修する」ことの本来的な意義も見いだせないばかりか、『小止観』の所作などという「自按摩の法」とは何か、また関口真大博士も指摘する『小止観』では「臍下一寸を憂陀那と名づく」といい、『摩訶止観』では「丹田は臍の下を去ること二寸半」といい、この二つの丹田とは何か、など修行所作に対する多くの疑問点が理解できません。

それは現在、私たちが常識として理解している西洋医学的な身体観と、天台大師の身体観には大きな相違があると考えられるからであります。

実際に、天台大師の四種の修行論の中で、病氣(病患)という身体性に直接関わる部分、『摩訶止観』第七章第三節「観病患境」、『天台小止観』第九章「治病」、『六妙法門』第四章「対治六妙門」、『禪門修証』第六章第四節「明治病方法」を比較して検討しますと、秦代から漢代にかけて集大成された医学書『皇帝内経』(『素問』『靈枢』)などに見られる「陰陽五行論」に支えられた「氣の医学」、またそのような「氣の生理学」に支えられた身体観を持っていたことが理解できます。

そして、このような身体観を前提とすると、まず「自按摩の法のごとくにして、手足を差異せしむることなか

れ。」とは、「天竺按摩」と呼ばれて婆羅門の法、今日でいう「ヨーガのアーサナー」にあたります。その起源は漢代の馬王堆帛書「導引圖」に見られ、かなり古くから行われていたことが分かります。

また二つの丹田については、当時は丹田といっても厳密に限定されていたわけではなく、下腹の中心部全体を下丹田と呼んでおり、「氣の医学」では、『小止観』の「臍下一寸」の場所は「氣海」と呼ばれ、「胃経」と「脾経」などの消化器系の機能に関係する募穴で、『摩訶止観』の「臍下二寸半」の場所は「関元」と呼ばれ、「胃経」と「膀胱経」などの泌尿生殖器系の機能に関係する募穴に当たります。

ですから、天台大師は『皇帝内経』などの「氣」の医学的知識と、ご自身の体験という経験即の知識から、この二つの丹田を分けて考えており、病氣の種類などによって使い分けていたと理解できるわけがあります。

そして、このような天台大師に見られた「氣の生理学」に支えられた身体観を前提とすると、今まで理解できなかった修行所作の一つ一つに対する理解が可能になると同時に、これによって思想性の背理にはそれを支える身体性の存在を無視し得ないということが明らかにすると

思われます。

葉王菩薩の捨身について

——捨身における供養と布施をめぐって——

市 川 智 啓

かけがえない己の身体を投げ出すという捨身は、婆羅門の為に身を投げ出す兎の捨身説話等、ジャータカ以来、多くの經典中に取り込まれ、特に菩薩行の利他を強調する大乘經典においては、『涅槃經』をはじめとして捨身を勸奨する文句と共に様々な捨身譚が説かれている。むろん、このような捨身譚において重要なことは、捨身したという事実よりも、捨身によって仏を法を尊重した、或は衆生への慈愛を全うしたという遵法の精神なのである。

しかし、真摯なる己の気持ちを表明するが故に、その信仰している經文そのままに捨身を行う僧が、五C半ばより諸の僧伝に多く伝えられ、中でも葉王菩薩の如き焼身・焼指者は三十名を数える。『妙法華』や『梵網經』

の流布と呼応するこの捨身の流行は、しかしながら、捨身自体を苦行の延長として捉え、大衆の面前にてのみ行う等、その目的となる供養や布施よりも、捨身という行為そのものが重要視されてしまったと思えるのであるが、このような供養と布施との混同は、經典上にも見られる。

例えば『妙法華』葉王品において、日月淨明德仏に對して葉王菩薩の前身である一切衆生喜見菩薩が行った焼身供養を諸仏が称える部分では、羅什は *puṇya* を「供養」に、*dana* を「布施」或は「施」と梵本と同様に區別して漢訳している。だが、一切衆生喜見菩薩が焼臂供養を終った後、釈尊が仏塔供養の功德を述べる部分にては、*dana* に比されるべき *pariyāga* を「供養」と訳出している。では、*pariyāga* は全て「供養」と訳出しているのかというと、その直前では「布施」と訳されている。

つまり、梵本にては *puṇya* と *dana* を別の行為として區別し、使用されているが、漢訳する時点で「供養」も「布施」も同義語的な扱われ方をされてしまっているのである。確かに供養も布施も同一範疇の実踐行動を伴うものであるが、それが表面的な言葉の差異として、異